

報告書



「多言語環境での子育ての「ことば」ワークショップ」

第 6 回 BM 子ども相談室 勉強会

開催日時:2022年3月6日(日)10:30-11:30 AM 於:武蔵野スイングホール

講師:奥村安寿子(一橋大学 日本学術振興会)

講義概要:

多言語環境での子育てにあたって、ことばの健全な発達を支えるために①家庭でできること、②保育所・幼稚園でできること、③学校に入る前に準備しておくことは何かを解説した。

家庭では、「①最も自信を持って安心して使えることば、②多くの経験、思い出を伴うことば、③最も豊かな内容を伝えられることば」で話しかけることが大切である。多くの保護者にとってこのようなことばは母語である。そこで、「母語が重要」と言われる。自信を持って安心して使えることばが重要なのは、ことばは、単なる意思疎通の手段ではなく、保護者と子どもの情緒的なつながりを作るものだからである。情緒的に安定したかわりは、愛着や対人関係の基礎形成に不可欠なものである。多くの経験や思い出を伴うことばが大切な理由は、それが文化を伝えるものだからである。豊かな内容を伝えられることばが大切な理由は、保護者の発話が長く、語彙や構文が豊富であると、子どものことばも豊かに育つからである。

ただし、家庭言語は、話題や語彙が限定され、偏りが大きく、指示的な発話が多い傾向がある。そこで、「早くしなさい」ではなく「時計の針が3になったら、出かけようね」のように声かけすることで語彙量も構文も増やすことができる。ほかに、読み聞かせ、ごっこ遊び、テレビ、アニメ、映画などを一緒に見て語り合う、なども豊かな言葉がけにつながる。

幼稚園・保育園では、保護者の母語による子育てを肯定しつつ、日本語は園で育てることを伝えることで、母語による子育てを奨励できる。また、「日本語がまだあまりわからない」「集団への参加が難しい」「基本的な生活習慣が未確立」などに対しては、日本語モノリンガルの

子どもと同様に、子どもの状況に応じた個別対応を進める(例、個別の指示を与える、わかりやすいことば、絵、動作で伝える、自由遊びでの声かけをする、集団参加を補助する等)のが基本となるだろう。そして、幼稚園・保育園で望まれることとして、多くの保護者には困難な、日本語の発達を見守ることが挙げられる。語彙数、指示の理解、文の長さ、助詞の使用、過去や未来のことを話せるか、自分の気持ちを話せるかなどの日本語の発達を客観的に見守り、日本語の伸びを保護者に伝えていく役割が、幼稚園・保育園に期待される。

就学準備としては、5歳児の到達目標として、ひらがなの清音をほぼ読めること(年長学年の夏ごろまでに45文字中40字が読める)ことを指摘した。なぜなら、小学校1年生の始めの文字指導時間は短く、清音がすでに読める程度の識字力がレディネスとして必要なためである。このレディネスが整っていない子どもの多くは、小学校1年生で音読が遅く、その後の学習も進みにくいことが予想される。ただし5歳児では、ワークなどで文字教えるのではなく、文字を読めるようになるための「土台」を育てていくことが望まれる。その「土台」として、音韻意識を育てること、そして文字への興味を育てることが挙げられる。音韻意識を育てるためには、しりとり、たぬきことば、さかさことば、音節で区切りながら言う、などの「ことば遊び」が役に立つ。文字への興味は、子どもと1対1での読み聞かせやカルタ遊び、文字探しなどのゲームが役に立つ。家庭で保護者と子どもと一緒にこれらに取り組むこと、また、保護者自身も、日本語に関心を持ち、日本語を楽しみ、学ぶ姿勢を子どもに示していくことが望ましい。

ワークショップでは、以上の講義に続き、事前の質問への回答と、言葉がけのロールプレイを行った。

第6回 BM 子ども相談室勉強会実行委員会

文責：鈴木庸子

2022年3月31日